

第11章 図書・電子媒体等

本学図書館は1967年度に設立されて以来、家政学部、文学部、健康福祉学部、学校教育学専攻科及び大学院の学生の教育・研究のために、体系的な蔵書構築を行い、2008年5月現在、246,267冊を蔵書している。森修文庫や現代詩文庫等、本学独自のコレクションも備えている。図書だけではなく、視聴覚資料の整備にも力を注いでいる。

適切なりプレイスを重ねることにより図書館システムを充実させ、学生や教員の利便性向上に努めている。また、他図書館とのネットワーク整備も進め、利用者のニーズに応えられる体制を築いている。更に、さまざまな学術情報へのアクセスが容易になり、利用者が増加している。

本学の図書館施設は、ゆとりあるスペースが特徴であり、ゆったりと落ち着いた雰囲気の中で、図書館を利用することができるように配慮されている。しかし、年々増加する図書を収納する書架スペースが不足する等の課題を抱えている。開館時間を19時まで延長し、更に2008年度に試験的に20時までの延長を実施した他、土曜日も開館しているが、日曜日・祝日の開館には至っていない。

学生や教員のニーズをたえず把握するように心がけ、より利用しやすい図書館の実現を目指している。

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

第15章

基礎データ

大学評価
(認証評価)
結果

目標

- ◎ジェンダー関係、一般教養関係、専門分野の資料・書籍の蔵書内容を見直し、多様な資料の提供を行う。
 - ◎年間の蔵書増について、購入数 4,000 冊以上と受入書籍を合わせて 5,000 冊以上を今後も維持する。
 - ◎紙媒体と電子媒体のそれぞれの役割と意義を認識する機会を種々設定し（設備利用説明会、館長懇話会など）、利用の促進を図る。
 - ◎今後の図書館の在り方として、レファレンス機能の充実と地域開放の拡大に努める。
 - ◎書架の増設、学習スペースの拡充を行う。
- 以上の目的を達成するために、図書館運営委員会の機能を将来構想と現状改善の二面について発揮できるよう位置付ける。また、系統的な選書体制を確立する。

A. 図書、図書館の整備

必須・図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他教育研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性

必須・図書館の規模、開館時間、閲覧室の座席数、情報検索設備や視聴覚機器の配備等、利用環境の整備状況とその適切性

[現状の説明]

本学図書館は、神戸女子大学設置後の 1967 年度に、蔵書冊数 17,839 冊（洋書 1,985 冊）でスタートした。その後、文学部、家政学部及び大学院設置を始めとして新学科・新学部開設や図書館司書・日本語教員養成講座等の開講に伴い関連資料を整備し、2008 年 5 月 1 日現在では、蔵書数 246,267 冊、雑誌タイトル数は国内 2,901 種、国外は 451 種を所蔵している（『大学基礎データ表 41』参照）。蔵書構成は、文学部、健康福祉学部の学生に供する人文・社会科学系の図書、家政学部の学生に供する自然科学系図書、全学共通教養図書からなり、体系的・総合的に収集している。

また、本学の特色あるコレクションとしては、近世芸能資料を有する「森修文庫」、国文学関係資料として「石原文庫・伊藤文庫」、英文学を中心とする「和知文庫」、民俗学関連の「喜多文庫」、そして「現代詩文庫」等がある。2006 年度からは、資格取得・国家試験等受験をする学生を支援するために、各種の関連資料を利用者に供している。なお、消耗品として購入した資料約 3,000 冊～4,000 冊は、所蔵冊数に含まれていない。

視聴覚資料は、利用者から充実を求める要望が増えており、数年前よりビデオカセット類から需要の多い DVD へと媒体を変えて、その購入数を大幅に増加させている（p.325 表 11-1 参照）。また、マイクロフィルム等の専門的資料は、史学科関連を中心として、日本語日本文学科、教育学科関連の資料を揃えている。

雑誌については、各学部・学科の要望に応じて購読してきた。国内雑誌は価格も低いので問題は少ないが、年々高騰する外国雑誌の購読料に対処するため、定期購読の見直しを行わざるをえなかった。その結果、1996 年度には 297 誌購読していた外国雑誌が、2006 年度には 190 誌に減少している。一方で電子ジャーナルは、冊子体だけの購読ができなくなった 1 誌を 2004 年度に初めて導入した。現在 4 種の電子ジャーナルを採用しており、冊子体との比率は 98 : 2 である。EBSCO や ProQuest 等のアグリゲータ契約がなかったが、現在全文検索も可能なデータベースのトライアルを実施中で、導入を検討中である。

1989 年度にコンピューターによる管理を導入して以来、図書館システムのリプレースを 3 度（1995 年 9 月、2001 年 3 月、2006 年 9 月）行った。2002 年 4 月には、図書館のホームページ

を開設し、近畿3大学図書館と公立の図書館2館の計5図書館（神戸大学、関西学院大学、大阪大学、神戸市立図書館、兵庫県立図書館）との横断検索も可能となり現在に至っている。また、同年、電子図書館システムの導入により、学内刊行の紀要類と「森修文庫」貴重本の情報発信を行っている。更にOPAC検索の充実を図り、学内だけでなく学外からも購入希望依頼、貸出予約、Inter-Library Loan/図書館間相互貸借（以下、「ILL」と示す。）申し込み、オンラインによるデータベース閲覧が可能になる等、利用者の利便性を大幅にアップさせた。

本学図書館は総面積5,926㎡を有し、私立大学平均よりも広い面積を有する施設である（表11-2参照）。1989年の竣工時よりAVホール、グループスタディ室等を備えており、教育、学修をするうえで最適な環境であると言える。学生閲覧席は346席であり、学生収容定員に対する座席数の割合は13.1%である（『大学基礎データ表43』参照）。この他、グループスタディ室は、ふだんはゼミ等に利用しているが、定期試験期間等混雑時には開放し、学修の場として提供している。3階に設置されている視聴覚資料を利用するためのAVコーナーは、集団用16席と個人ブース席11席を備えていたが、DVD資料の増加に伴いDVD視聴に対応させるため、2004年度にAV機器の総入れ替えを実施した。また、常設展示、大学祭等の展示等の図書館活動で利用するために、展示ケースの増設、パネルの購入を行い活用している。

書架の収容能力については、1989年に現在の図書館が竣工された時点での収容能力は24万冊であった。1991年度所蔵数128,684冊に対し、2008年5月時点で約24.6万冊と2倍の所蔵冊数になっている。当然、各教員の研究室・共同研究室等にも配架されているが、書架の不足は想像に難くない。今後も年に5,000冊から7,000冊の増加が見込まれ、その7割から8割は図書館配架となる。

開館時間は、図書館職員の時差勤務を採用し、2002年度より19時まで延長された。また、2008年度には、前期試験の準備期間と試験期間に当たる6月23日から8月1日に限り、20時まで開館することにした。この他、土曜日は10時から17時の開館となっているが、日曜日・祝日の開館は実施していない。

表11-1 視聴覚資料受入状況（VHSとDVD，DVD-ROMの比較）

年度	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
VHS（巻）	138	190	148	56	189	112	213	93	40	34
DVD（枚）	0	85	18	11	4	7	34	51	187	158

注) 1999年度、2000年度のDVDは各1タイトル分の枚数

表11-2 平成18年度学術情報基盤実態調査結果報告

区分（平均）	総面積（㎡）	閲覧座席数（席）	書架収容力（冊数）
本学図書館	5,926	346	240,861
Cレベル私立大学図書館	3,734	389	300,550
私立大学図書館	4,290	458	395,176
全国大学図書館	5,003	477	457,326

注) Cレベル：2～4学部

[点検・評価—長所と問題点]

本学の図書資料の年間受入冊数は約6,600冊（過去5年間平均）であり、冊数としては目標を達成しているものの、全国平均の約8,000冊を下回っている（p.326表11-3参照）。適切な蔵書構築のためには、教員の協力が不可欠であるため、教員に対して選書要請をしているが、対

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

第15章

基礎データ

大学評価
(認証評価)
結果

応する教員が少ないのが問題点である。また、学科別の予算枠も運営委員会（2007年度第2回図書館運営委員会）で了承を得ているが、例年年度末に購入依頼が集中する傾向にある。図書費の増額が難しい状況下で、全国平均受入冊数に近づけるためには、年度末の教員の駆け込み購入による高額図書を選書するのではなく、学生に供したい一般・参考図書をコンスタントに選書することが肝要である。また、蔵書比率の低い洋書の選書を心がけることが重要であろう。更に、重要課題の一つとして電子ジャーナル導入の遅れがあげられる。外国雑誌の価格が年々高騰しているため、今後、雑誌費が図書資料費の1/2以上を占めるようになるのは時間の問題である。書庫の狭隘化の課題と合わせて電子ジャーナル導入を早急に推進する必要がある。

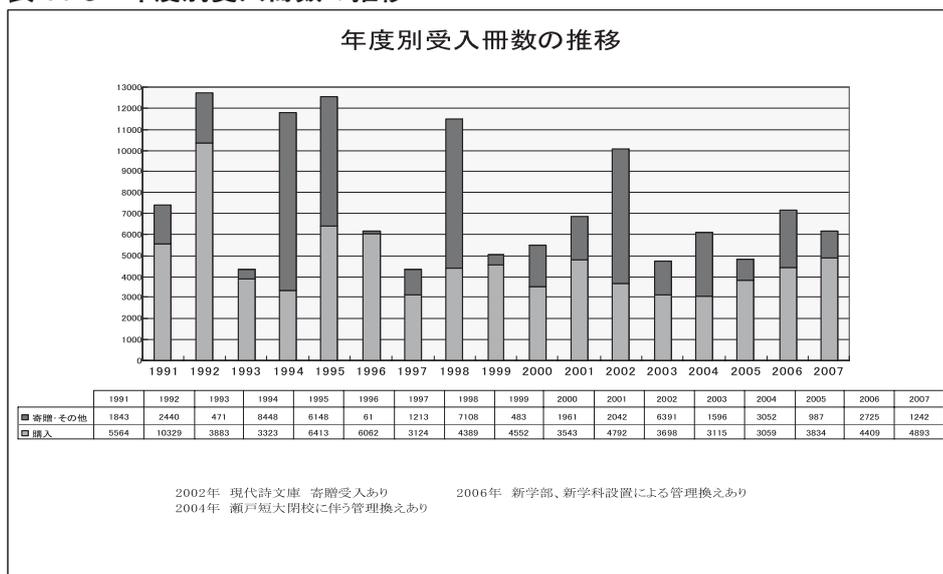
本学図書館の設備としては、スペース的にはゆったりとしていることが特徴であると言える。しかし、書庫を含めた書架不足やAV資料の閲覧場所の不足の2点が問題である。書庫は、1階と地下が積層書庫となっているため収容能力に限界があり、集密書架への改修も検討したが、費用面と耐震面から問題があることが明らかになっている。また、AV機器数は、現状では学生の利用には十分応えているとは言えず、増設するための場所の確保が困難である。

閲覧席については、複数使用の閲覧席ではなく、個人ブース増設の要望に応えるために毎年増設している。定期試験期間等の混雑時にはグループスタディ室を学生に開放して座席の確保に努めており、ゆとりの空間としてのブラウジングの座席数を合わせると目標数に近い。ただ、ここ数年教室不足からAVホールやグループスタディ室を講義室として使用する機会が多くなり、その移動等で静かな環境に影響が出ている。

開館時間の延長と休日開館の実施については、他の女子大学の多くが18時～20時で閉館しているが、本学図書館の場合、①職員勤務体制、②地の利が悪い、③施設面積が広い分、開館による光熱費等の諸費用が利用数に見合わない、など問題点も多い。前述したとおり2008年度の前期試験期間前後に、試験的に20時までの開館を実施したが、これを継続していくためには、上の①～③の問題点のクリアが必要となる。

ネットワークの整備については、2006年のリプレイス後、図書館ホームページの‘マイライブラリー’を活用することによってWeb上で種々の申し込み等が可能となり、直接来館の手間が省け、利便性を享受することが可能となった。

表 11-3 年度別受入冊数の推移



[今後の改善・改革に向けた方策]

今後の改善・改革に向けての課題は、資料の量的問題だけでなく質的問題の改善があげられる。

年間購入冊数4,000冊という目標を達成するためには、館員の努力だけではなく、課題の項で述べた教員の選書協力が不可欠である。2007年3月よりeメールによる全教員への情報発信や協力要請が可能となった。今後は、教員の能動的な蔵書構築ができるよう、教員によって構成される図書館運営委員と図書館との協同体制を推進していくことが重要である。

質的問題としては、「女子大学」であるという本学の特徴が学修や研究活動に発揮できるよう、ジェンダー関連、女子教育、女性史等の図書資料の充実も必要である。量的課題の改善と同様に、教員との協同によって収集を進めていく必要がある。

雑誌については近年、紙媒体から電子化が急速に進み、出版社によっては電子媒体での提供に限るものも出ており、教員の意識改革が迫られている。そのために図書館は、積極的に電子ジャーナルやデータベース導入のデモを実施し、また、各学科での調整については図書館運営委員の協力を得て、電子化の利用促進を図っていく。

施設面では、ゆとり空間が充実しているという良さを残しつつも、開架図書用書架の増設を図る方針である。視聴覚資料の閲覧場所確保については建物の構造上の制約があり、現時点での増席は困難であるため、パソコン自習室の機器を利用できるよう情報処理室管理者と協議して対応していくこととする。書庫は、積層書庫が設置されているため移動書架への切り替えが困難な現状から判断すると、不要な資料の除籍・廃棄を進めつつ、資料の新鮮度を向上させる方法を検討する必要がある。開館時間の延長については、人材確保が必要になるため、人件費等の問題を法人本部と協議して取り組んでいく。

ネットワークの整備については、本学図書館ホームページを介して情報発信を行っているが、OPACによる検索の容易さはどうか、利用者の要求に応える機能であるか、書誌データの修正は適宜行っているか等を図書館が日常的にチェックを怠らないようにする。2006年度の図書館システムリプレースにより利用者の利便性は向上したが、今後は、教員を含めた利用者からのサービス内容に対する要望をSE(システム・エンジニア)と協同で改善し、レファレンスサービス機能を更に充実させていく。

また、図書館員のレファレンスサービス能力向上のためには、図書館員各人の日常的な自己研鑽が要求される。その方法の一つとして、館内研修において情報交換をし、全員が「レファレンサー」であるという自覚を持てるように研修を行う。更に、国立国会図書館が実施する「レファレンス協同データベース事業」に対して情報提供し、そのデータベースを活用する方法を検討していく。

B. 情報インフラ

必須・学術情報の処理・提供システムの整備状況、国内外の他大学との協力の状況

必須・学術資料の記録・保管のための配慮の適切性

[現状の説明]

本学図書館システムは、2001年のリプレースを機に本格的にNational Institute of Informatics/国立情報学研究所(以下、「NII」と示す。)に所蔵登録をすることとなった。「iLiswave」を導入・整備することにより、NIIの新CATに対応し、OPACにより目録所在情報を利用者に提供している。2006年9月のリプレースでは、新システム「Web

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

第15章

基礎データ

大学評価
(認証評価)
結果

版iLiswave-J」を導入し、本学の所在情報からNIIへの情報検索への切り替えが瞬時に行えるようになり、利用者の利便性に応えている。また、神戸女子短期大学も本学と同システムを導入した結果、短期大学の資料も自由に検索可能となり、資料の相互利用が進展している。

2002年ホームページ開設以来、雑誌記事索引、朝日新聞記事データベース、CiNii等のデータベース等をホームページを通して閲覧できる。ID、パスワードを入力すれば、貸出予約、ILLの申し込み等は、学内だけではなく、自宅をはじめ学外からも可能となった。「森修文庫」はデータベースをホームページ上で公開し、情報発信を行っている。

国内外の他大学への文献複写・貸借は、NIIのILL相殺制度に加入しているため、利用数は年々増加している（表11-4、p.329表11-5、p.330表11-6参照）。また、阪神地区大学図書館の相互利用協定が簡略化され、紹介状が廃止された。その結果、予め資料の所蔵調査をした上で利用者が身分を証明するものを提示すれば利用可能となった。

本学刊行学術資料、いわゆる紀要類は各学科及び学部毎に毎年発刊している。図書館には創刊号から近刊のものまで保管し、バックナンバーは製本をしている。学部毎の紀要は各大学図書館ならびに各種機関に送付している。学科毎の紀要は各学科の管理下で行っている。また、これらは著作権を処理して、図書館ホームページ上で全文検索可能となり、学内外に情報発信をしている。

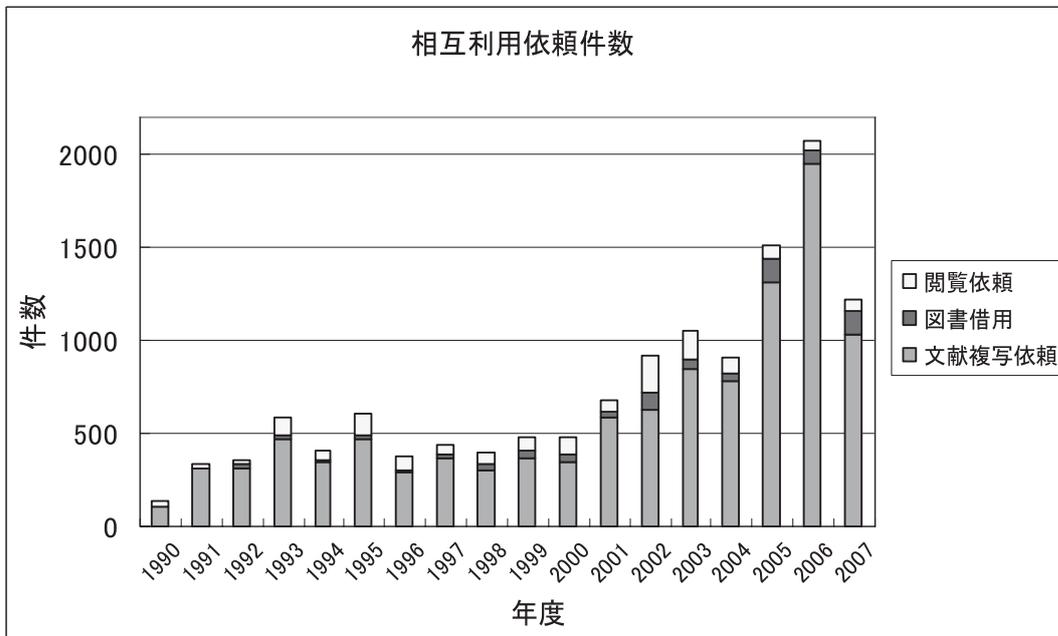
なお、和装本を多く含む「森修文庫」は、貴重図書館に別置している。その閲覧利用に際しては、事前の連絡を求める他、「特別指定図書閲覧願」を提出してもらい、特別閲覧室内での閲覧に供する等、慎重な取り扱いを行っている。

表11-4 相互利用状況の推移

年度	文献複写依頼	文献複写受付	図書借用	図書貸出	閲覧依頼	閲覧受付
1990	107	—	—	—	24	1
1991	309	18	—	—	27	6
1992	313	30	23	5	23	2
1993	471	26	16	3	98	3
1994	343	23	11	5	53	7
1995	467	42	23	3	114	15
1996	294	48	12	4	71	4
1997	369	39	18	0	51	12
1998	307	46	26	4	68	19
1999	368	48	34	3	78	13
2000	343	58	41	0	94	14
2001	586	60	32	1	57	14
2002	622	82	102	5	189	251
2003	844	365	56	23	157	15
2004	778	444	49	30	78	35
2005	1,317	774	126	37	67	17
2006	1,952	620	71	53	47	6
2007	1,034	714	121	61	62	14

表 11-5 相互利用（依頼）件数の推移

年度	文献複写依頼	図書借用	閲覧依頼	合計
1990	107	—	24	131
1991	309	—	27	336
1992	313	23	23	359
1993	471	16	98	585
1994	343	11	53	407
1995	467	23	114	604
1996	294	12	71	377
1997	369	18	51	438
1998	307	26	68	401
1999	368	34	78	480
2000	343	41	94	478
2001	586	32	57	675
2002	622	102	189	913
2003	844	56	157	1,057
2004	778	49	78	905
2005	1,317	126	67	1,510
2006	1,952	71	47	2,070
2007	1,034	121	62	1,217



第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

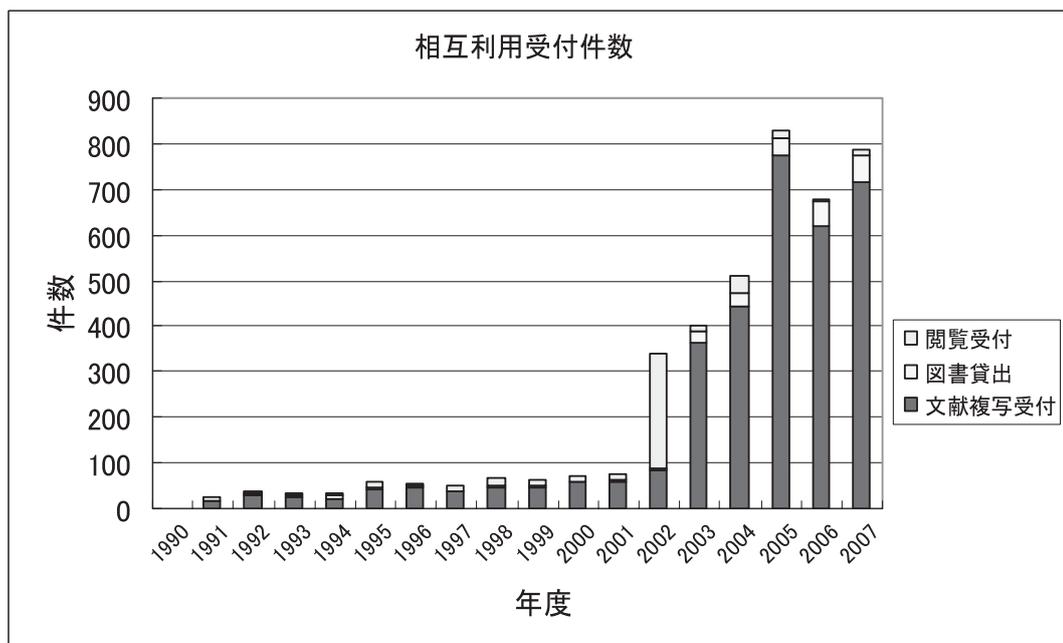
第15章

基礎データ

大学評価
(認証評価)
結果

表 11-6 相互利用（受付）件数の推移

年度	文献複写受付	図書貸出	閲覧受付	合計
1990	—	—	1	1
1991	18	—	6	24
1992	30	5	2	37
1993	26	3	3	32
1994	23	5	7	35
1995	42	3	15	60
1996	48	4	4	56
1997	39	0	12	51
1998	46	4	19	69
1999	48	3	13	64
2000	58	0	14	72
2001	60	1	14	75
2002	82	5	251	338
2003	365	23	15	403
2004	444	30	35	509
2005	774	37	17	828
2006	620	53	6	679
2007	714	61	14	789



[点検・評価一長所と問題点]

本学図書館が本格的にN I Iの目録所在情報へ所蔵登録したのは2001年度以降のため、約10万冊以上の図書の遡及入力が必要となる。N I Iの方針に従い、2018年度までには現在N I Iに未登録図書の遡及入力が必要とされる。I L Lの貸借においては、借りる件数が多く貸す資料件数が少ないというアンバランスな貸借結果が現れている。また、国外への依頼・受付が数年に一度といった程度で、国際化という点では問題を残す。

また、紀要の発行、発送についてのシステムが整備されていないのが課題である。全文をWeb上で配信すると著作権処理の問題が生じるため、作業が遅れるという問題があり、特に家政学部の紀要については大学院生と教員の共同執筆の場合、教員側がWeb上での配信を拒否するケースが多い。

[今後の改善・改革に向けた方策]

I L Lの相殺制度加入においても、複写依頼、貸借の借が多いという中小の大学図書館の特徴が如実に出ています。一方、他大学図書館の利用数が増加している傾向自体は好ましいが、当館も他大学に対して借りでなく貸しの体制にもっていく必要がある。その方策の一つとして、O P A Cの整備にとどまらずN I Iへの所蔵登録を増やさなければならない。

紀要の投稿規程に本学図書館ホームページに全文掲載を条件としてあげれば、国内外へ本学学術情報の発信が容易になる。

ホームページ掲載のコレクション情報発信、特に近世芸能関係資料の画像公開により、研究者の閲覧申し込みがあるが、できる限り迅速にアクセスできるよう手続きの簡略化も今後の対策の一つと言える。

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

第12章

第13章

第14章

第15章

基礎データ

大学評価
(認証評価)
結果

